



Title	中国のトランスジェンダー問題と「一般市民」への啓 発—メリトクラシーとエンパシーの地平から—
Author(s)	Zhao, Yingying
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96184
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認した ため、全文に代えてその内容の要約を公開していま す。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文につい てをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (趙 瑩 瑩)

論文題名

中国のトランスジェンダー問題と「一般市民」への啓発—メリトクラシーとエンパシーの地平から—

論文内容の要旨

本稿は、「発声」しにくい中国社会において、トランスジェンダーの権利擁護の「担い手」とされている性的マイノリティ NGO、トランスジェンダーである子どもの親（以下、トランスジェンダーの親と略す）、およびトランスジェンダー当事者たちがどのような戦略を用いて生きる場を広げているかに焦点を当てた。これらの実践を阻害する社会的要因を検討することが本稿の目的である。中国のトランスジェンダーの人々の社会的な位置づけや経験を理解することで、過熱したメリトクラシーの中国社会とシスノーマティビティの社会構造、および制度の問題点を浮き彫りにし、改善の余地を提示する。

第1章では、中国において性的マイノリティに対する「理由がはっきりしない抑圧」の不当性を解明した。性的マイノリティ問題に関心で、それに関する法律や政策の制定に参加しておらず、性的マイノリティの人々を差別していないと考える人々、いわゆる「一般市民」の存在が重要であることを強調した。つまり、国家が同化に関する曖昧なメッセージを送り、「一般市民」を同化させることで、性的マイノリティの人々を社会的に排除している。「一般市民」は実際に性的マイノリティに対して権力を有しており、中国における性的マイノリティに対する「理由がはっきりしない抑圧」は、国家と「一般市民」が一体となって生じうるが、「一般市民」一人ひとりの意識によって変えることが可能であると示唆された。

第2章では、国や政府、性的マイノリティ NGO、「一般市民」との関係と動向に焦点を当て、性的マイノリティ NGO がトランスジェンダーの人々のために行った実践とその阻害要因を分析した。具体的には、トランスジェンダー・コミュニティに対してはアイデンティティの構築戦略を立てている。安心かつ安全な空間を提供し、当事者たちが互いの違いを認識しつつも、幻想的なコミュニティを築き続けている。同時に、「一般市民」に対しては、トランスジェンダー問題を「みなと関わる問題」に、トランスジェンダー当事者を議論される対象から議論を提起する対象に転換することで「一般市民」とのアイデンティティを超える連帯を呼びかける戦略を実行している。この戦略は、トランスジェンダーの人々の背景を理解し、その苦境をもたらした構造的問題をマクロな視点から見なければ、トランスジェンダーの人々との連帯を築くことができず、それゆえに「一般市民」の社会的エンパシーを発揮することが不可欠であると論じた。しかし、近年国や政府による性的マイノリティに関する情報への規制や、性的マイノリティの人々への見下しと他者化は、シスノーマティビティの社会構造を強固にし、「一般市民」の情報入れとマクロの視点取得を妨害している。こういった行為が「一般市民」によるトランスジェンダーの人々に対する社会的エンパシーの駆使を難しくさせていることは、性的マイノリティ NGO の実践の阻害要因なのだと主張した。

第3章では、「一般市民」であったトランスジェンダーの親、トランスジェンダー当事者、中国社会という三者の動きに焦点を当て、トランスジェンダーの子どもの受け入れを阻害する社会的要因を探索した。トランスジェンダーの子どもの心から受け入れるのではなく、一旦受け入れのふりをして子どものメンタルを安定させ、子どもに学業や仕事に集中してほしい親を「道具的受け入れの親」と呼んだ。それに対し、トランスジェンダーの子どもの心から受け入れて子どものジェンダー・トランジションを支援している親を「情緒的受け入れの親」と呼んだ。カミングアウトされた最初、どちらの親もメリトクラシーの考え方に影響され、学業と仕事を人生の最優先事項だと考えていた。しかし、情緒的受け入れの親たちは、対人的エンパシーを駆使して最終的に子どもの立場になってその気持ちや欲求を尊重し理解した。一方で、道具的受け入れの親たちは、「高考」や「就職・昇進学歴論」から見られる過熱したメリトクラシー社会により強く影響されている。そこで自他意識を形成できず、子どもにとってメリトクラシー的な競争で勝利することが何よりも大事で、達成してから他者に認められるのだと思い込んでいる。そしてこういった思い込みが強くなるほど、子どもの視点取得ができなくなり、結局子どものジェンダー・トランジションを受け入れられないのだという結論に至った。

第4章では、トランスジェンダー当事者と「一般市民」の間のインタラクションに焦点を当て、家庭、学生寮、職場、

公共空間という4つの場面でトランスジェンダー当事者の社会的排除をもたらす社会的要因を見つけ出した。シスノーマティビティの社会構造は、権力者の対人的エンパシーの欠乏や、「一般市民」の未知なトランスジェンダー当事者への不信感や恐怖心をもたらしている。これは、トランスジェンダー当事者たちの実践を妨害されている要素であることを明らかにした。

第5章では、過熱したメリトクラシーの中国社会は「一般市民」を経由してトランスジェンダーの社会的排除問題の解決を阻害するだけでなく、トランスジェンダーの人々にも直接的な影響を与えることを説明した。さらに、本稿の結論を提示した。国家は、性的マイノリティの人々への見下しと他者化や、性的マイノリティに関連する内容への制限などを通して、シスノーマティビティの社会構造を強化している。これに加え、メリトクラシー的なイデオロギーの浸透により、「一般市民」が問題をマクロな視点で見る能力が弱まって、勝者だけが他者に認められる、という考えが広まっている。これらのことが、「一般市民」がトランスジェンダーに対する社会的・対人的エンパシーを発揮するのを難しくしている。同時に、過熱したメリトクラシーとシスノーマティビティの社会構造が相まって、トランスジェンダー問題の発見と解決を阻害し、トランスジェンダー内部での差別の連鎖を引き起こす可能性があるという、トランスジェンダーの社会的排除における三者関係を示した。これが、中国のトランスジェンダーの社会的排除の解決を阻害する社会的要因だと主張した。最後に、メリトクラシーが私たちのエンパシーの力を侵食していることを意識することは、トランスジェンダーの社会的排除問題だけでなく、将来の自分たちの生活のためでもあるという「一般市民」への啓発を提起した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Z H A O Y I N G Y I N G)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	川端 亮
	副 査	教授	辻 大 介
	副 査	准教授	遠藤 知子

論文審査の結果の要旨

本論文は、さまざまな制限がかかる中国社会において、トランスジェンダー当事者とその関係者がどのようにして生きていこうとするのかについてインタビュー調査を行い、それらの人々の生き方を妨げる社会的要因を分析して、差別解消に向けた一つの筋道を示すことを目的としている。

第1章では中国の性的マイノリティの研究を、社会文化的視点、社会運動の視点、ジェンダー・アイデンティティの視点から整理し、性的マイノリティの人々や活動家は、中国の文化や法制度、偏見を持つ人々、支配的な欧米モデルによって影響を受けていることが示される。先行研究の限界の一つとして、性的マイノリティの問題に無関心で、自分は差別をしていないと考えるような「一般市民」の役割が十分に検討されていないことに着目し、性的マイノリティを二者の関係ではなく、三者関係で捉えていく、という本論文の視角が示される。

第2章では5つの性的マイノリティのNGOの職員とその主催イベントに参加した5人のトランスジェンダーの当事者に対するインタビュー、第3章では6人のトランスジェンダーの親に対するインタビュー、第4章では15人のトランスジェンダー当事者に対するインタビューの結果を分析している。

社会的エンパシーの観点からは、国や政府は性的マイノリティの情報を規制し、ジェンダー規範に従わない人々を見下しの構造、他者化をすることで、身体的性と性自認の一致を当然とする社会構造を「一般市民」に浸透させるため、「一般市民」はトランスジェンダーに対する社会的エンパシーの向上が阻害される。

親に関しては、子どもの性自認を受け入れられた親は、対人的エンパシーが働いており、子どもの立場になって理解しているが、一方で受け入れられない親に見られる阻害の過程として中国社会の加熱したメリトクラシーに影響された親が、子どもが受験競争に勝利することのみが他者から認められる方法であるという考えになり、子どもを理解できなくなり、結果的に子どものジェンダー・トランジションを受け入れられなくなることが描かれる。

第4章ではdoing transgenderの概念を用いて、家庭、学生寮、職場、公共空間でのトランスジェンダーの行動戦略を分析した。公的な領域ほど自認する性のように振る舞うdoing genderはリスクを伴う傾向が見て取れたが、トランスジェンダー当事者は領域に応じてジェンダー戦略を使い分けていることが明らかになった。

第5章の考察では、過熱したメリトクラシー社会である中国では、メリトクラシーが当事者の親のエンパシーの力を阻害するだけでなく、当事者にも影響を与え、カミングアウトや自認するジェンダーのように行動することも妨げることがある。また「一般市民」の社会的エンパシーの働きさえも阻害する可能性もある。社会的エンパシーが働かないとトランスジェンダーの人々を他者化し続ける。メリトクラシー社会、トランスジェンダーの人々、「一般市民」のこのような3者関係がトランスジェンダーの社会的排除をうんでいるのである。

本論文のインタビューは、どちらかというとアプローチが容易ではないトランスジェンダー協力者に対するものであるが、相当な数のインタビューを行っており、資料としての価値も高い。また、文献を幅広くリサーチしており、背景となるトランスジェンダーに関しては、欧米や中国の研究についてよくわかるまとめとなっている。

トランスジェンダーに対する差別の問題を中国社会で加熱するメリトクラシーと、シスノーマティビティな社会構造によって社会的不平等に気づかず、エンパシーの力を働かすことが難しい「一般市民」をうみ、差別が生じ、その構造を指摘することで差別問題の解消に向けた提言を行った本論文は、博士（人間科学）にふさわしいと判定する。